鬼母に切られた

ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
鬼母に切られた

【Ｎコード】
Ｎ２０７２Ｐ

【作者名】
ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
　息子に何のためらいもなく厳しい仕打ちをする鬼母。ある日、竜也くんは鬼母にとっても大切な感じるものを切られてしまったのです。

竜也が自分のおちんちんを引っ張ってみたのは、小学生になってすぐの頃だった。お風呂上りに体をふいているとき、ブラブラしているおちんちんの先を引っ張ったら伸びるのかな、と考えたのがきっかけである。もちろん竜也の中にマスターベーションなどという意識もなければ言葉も知らない。はじめて引っ張ったおちんちんはよく伸びた。面白かった。おしっこの出るおちんちんを引っ張ると、長さが2倍くらいになる。ちょっと痛いけど楽しかった。

竜也の母はなかなか教育熱心である。学校から帰ってくるとおやつの前に宿題をやる、というルールを作った。自宅の1階で小さな個人商店を営んでいる母は仕事の合間を見ては竜也の宿題を監視することにしていた。宿題が進まずやる気をなくした竜也が近くにあったマンガ本を読んでいたことがあった。監視にきてそれを見つけた母は即座にマンガ本を取り上げ、目の前でビリビリに破いた。ミニ四駆をいじっていた時は床にたたきつけて粉々にしてしまった。宿題がおわっておやつを食べたあとも勉強の時間は続くのだ。週に2日は塾に、1日はスイミングに、1日は書道教室に、1日はピアノ教室へと習い事の嵐だ。帰ってきても夕食を挟み、塾の宿題やドリルを課された。基本的に土日以外は遊ばせてもらえないというまだ小学校低学年というのにやけにスパルタの母だった。

おちんちんを引っ張る面白さを知った竜也は、時々勉強中にもパンツとズボンからおちんちんを出して引っ張っては遊んでいた。母に見つかればまた怒られるので足音がしたらすぐしまうようにしていた。しかしあるとき、それが見つかってしまった。「何してるの！！！」金切り声で竜也をののしった後、母はズボンとパンツを下ろさせ、靴べらで竜也のおちんちんを3回強く叩いた。幼稚園生の頃から、おねしょをすれば素手でおちんちんを叩くのが母のお仕置

きだった。

靴べらで強く叩かれた痛みは竜也の心身にしばらく残った。だから勉強中はやらないようにしていた。それでも時々、勉強が行き詰るとあの快感が恋しくなってしまう。小学校3年生になった竜也は、その日も夕食後に算数のドリルをやらされていた。どうしても計算がうまくできず、嫌になってきたとき、あの快感が恋しくなった。母はまだ台所のはずだ。少し大きくなりだしたおちんちんを引っ張るのにはズボンは脱いだ方が都合が良い。ズボンを膝までおろし、パンツを下げておちんちんを取り出した。びーん、と伸ばして楽しんでいたその時、後ろから母の声がした。

「またおちんちん引っ張ってる！何回やっちゃだめっていえばわかるの！」

勉強中に見つかったのは2回目だが、寝るときに触っていて怒られたことが何回かあった。あるときは「そんなことしてるなら、おちんちん切っちゃうよ」と脅されたこともあった。今日の母は本気で怒っている。「ちょっとこっちの部屋に来なさい」と母がいった。恐る恐る竜也が居間へ行くと、ズボンを脱いだまま仰向けに寝るよう指示された。またおちんちんを叩かれる、竜也はそう思った。

予感はあたり、母は竜也のパンツに手をかけると一気に下までさげ、抜き取ってしまった。下半身裸の状態で仰向けになり、今にもおちんちんに棒が飛んできそうであった。しかし今日の母は叩くのではなく竜也のおちんちんの先っぽをつまんだ。ずっと伸ばし続け

てきたせいか、大分皮が余っていた。その皮をつかむと母は強く引っ張った。「こうやって引っ張ると気持ちがよいの？楽しいの？」と聞いた。竜也が「うん」とうつむきながら答えた次の瞬間、母は目にもとまらぬ速さで右手に大きなハサミを手にした。そして、「だったらおちんちんの皮なんか切っちゃいます！！！」というのと同時に

「チョッキン！！！」

と皮を切ってしまった。皮を思い切り引っ張った上で亀頭ギリギリのところを切ったので、母が手を離した竜也のおちんちんは皮が半分くらいしか被っていない状態となってしまった。もちろん大量の血が噴出していた。何の前触れもなく起こった激しい痛みと驚き、そして恐怖で竜也は泣き出した。パニックで泣き叫ぶ竜也に何の同情をするわけでもなく、「こうすればもう皮引っ張って遊べないでしょ」と冷酷に言い放つ母だった。

母は消毒液をしみこませた脱脂綿で血のついた竜也のおちんちんをぬぐった。消毒液がしみて益々泣く竜也だった。母は消毒をすませると傷の化膿止めをぬりつけ、おちんちんを包帯で覆った。まだ泣いている竜也に向かい、再び冷酷な言葉を投げつけた。

「あと１０数えるうちに泣き止まなかったらおちんちんごと切っちゃうからね！！」